

(十) 天雲 あまくも

若い軽の即位で、後宮は一気に華やかになった。即位と同時に紀皇女が后きこうなに立った。更に名門紀氏と石川氏の娘が妃みめに選ばれ、軽の乳母あがたいぬかいの 犬養三千代みちよの養女みやこ 宮子おとしも夫人になった。色とりどりの衣装に身を包んだ若い女官たちが行き交う有様は、ここしばらく見られなかった光景である。

紀は阿閉にとっては、従妹であり、夫草壁の妹でもある。これまでも後宮で顔を合わせるが多かった。姑である阿閉に紀は礼節を守りながらも親しみを持って接した。だがまだ幼さの残る二人の妃は畏まるばかりで、阿閉に心を開くことはない。夫人の宮子は風になびく領布ひれのように捉えどころがない。ともするとこの領布はするすると伸びて来て何かに絡み付こうとする。ぬれぬれとくねる領布の先にちろちろと光る赤い舌を見ると光るような気がして、阿閉は目をこすった。

「宮子は蛇の化身ではないのか。」

軽は阿閉の心配など気にもしないで笑っている。

「そうかもしれません。宮子の母は三千代ということになっていますが、本当は鴨かも氏の娘かもしだそうですから。」

鴨氏は三輪みわし氏同様古くから大倭やまとに住みついた氏族で、蛇を御神体として祀っている。

多くの女たちに囲まれて、軽は毎日何をしているのか。成人した時から手を離れた軽ではあるが、これまでは離れていても心は通じているつもりだった。それがこの頃阿閉には自信がない。軽が何を考えているのかわからなくなった。目の前にいる息子がどこか遠くへ行ってしまったような寂しさを覚えるのである。

菟野も自分が草壁と結婚した時、こんな思いをしたのだろうか。軽と紀の縁談の時、弓削と氷高の縁談まで持ち出したのは、なぜだったろう。

「寂しくなります。」

阿閉は気が進まなかった。

「そなたにはまだ吉備がいるではないか。」

あれはこのことだったのか。その吉備には、近頃長屋が通って来ている。一人になった阿閉はあらためて菟野の寂しさと、軽の即位にかけた執念を思った。

后になって、初めて紀は軽と寝所を共にした。まだ子供だと思っていた軽が、既に男になっていたことに紀は衝撃を受けた。

「皇女様に失礼があつてはなりませんゆえ、宮子にお相手をさせたのです。」

紀の問いに、三千代は当然と言わんばかりに二重の顎をしゃくろる。

「そんな。妻の私が五年も待ったのですよ。人を馬鹿にするにも程がありません。」

「皇子様に夜のお作法をお教えるのは、乳母の勤めです。宮子は私の代わりに勤めを果たしたまでです。」

「あんまりです。妻の私に何の断りもなく。宮子が宮に出入りしているのは知っていましたけれど。夜殿のお相手をさせたのは何時からですか。」

「まだほんの一年ばかりでございますよ。」

紀は怒りの余り、その場に倒れた。妻とは名ばかりで、夫は完全に三千代の手の中にあることを思い知らされたのである。

その後も軽はたまにしか顔を見せない。こらえきれずに歌を贈った。こんな恨みがましい歌もある。

軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに

玉藻のうへに独り宿なくに

(390)

何度歌を贈っても、軽に届いているものかどうか。

「お上はお疲れですから、今宵はお渡りになりません。」

三千代の返事があるばかりである。

事實はどうあろうと、后は后である。紀の立后で、弓削の恋はますます難しくなった。堰かければ堰かれるほど想いは募る。菟野の行幸に供奉して

難波へ旅立っても、紀の面影は脳裏から去ろうとはしない。今となっては叶

わぬ恋に没頭することだけが、弓削の生き甲斐になっていた。恋に我を忘れ

た男には、妻の寂しい想いも届かない。弓削は歌う。

夕さらば潮満ち来なむ

住吉の浅鹿の浦に玉藻刈りてな

(121)

大船の泊つる泊りのたゆたひに

難波から弓削の歌が届けられると、日向の妻は紀に囁いた。

「夫人様ばかりご寵愛あそばして、お上のなさりようはあんまりです。それに引き換え、弓削皇子様のお歌のお上手なこと。心からの想いが籠っていますよ。あのご立派な皇子様がこんなに想っていらっしやいますのに。一度逢っておあげなさいませ。」

紀は返事をせずに歌を見つめている。弓削の骨太の文字に、肉体の奥底深く突き立てられているように、体の芯が熱くなる。この火照りは、軽の華奢な体では抑えることができない。火照って潤んだ叢が弓削の体を求めている。紀の息遣いが荒くなるのを日向の妻は見逃さない。

「ああ、あの逞しい腕に抱かれたら、私なんか気を失ってしまうでしょうに。」

紀の心を見透かすように言葉が続ける。紀は我に返って眉をひそめた。

「お前は私に死ねと言うの。」

「とんでもございません。誰にもわかりはしませんよ。一度だけですもの。」

その、誰にもわからないはずの弓削の恋が、いつの間にか巷の噂になっている。 「あれは何だろう。」

広売の家へ行こうとして軽の市を通りかかった佐留は、人だかりを見て足を止めた。

「弓削皇子様がお后に恋をしているそうだ。」  
得意げにしゃべりまくっている男がいる。

「まさか。」  
心の臓が止まりそうになった。もっと詳しく聞こうと一歩踏み出して気がついた

「あの男は。」  
しゃべっている男の陰に、ピタリと寄り添うように立つ背の高い男。その頬の傷に見覚えがあった。もう十年以上も前、月明かりの中で見かけただけが、あの傷、あの背格好。間違いない。

不吉な予感がした。踵を返すとそのまま弓削の宮へ急いだ。弓削はいな

い。避暑のために吉野へ行ったという。  
「よりにもよってこんな時に吉野とは。」

古人大兄や浄御原宮大王の例がある。間違いがなければよいが。不安に胸がバクバクと音を立てる。居合わせた長意吉麿を捕まえた。意吉麿は佐留の歌仲間である。

「噂は聞いたか。」

「聞きましたよ。厄介なことになりましたね。」

「何を呑気なことを。知っているならどうして吉野行きをお止めしなかったのだ。」

「だからお出かけになられたのです。日向王様が勧められたのです。お留守の間には噂も落ち着くでしょうと。」

「馬鹿な。吉野などへ行ったら、謀反を疑われてしまっぞ。」

「まさか。」

意吉麿には事の重大さがわかっていない。

「とにかくすぐに使いを出してお帰りいただくのだ。よいかすぐにだぞ。」

佐留はその足で長の宮に駆けつけた。

「大津兄上の時に陰で動いていた男が噂を流しているだと。」

大津の事件がまさまざと思いきされる。

(あぶない。)

長も慌てて吉野へ使いを走らせる。

丹生の河瀬は渡らずてゆくゆくと

恋痛きわが背いで通ひ来ね

(130)

吉野の山は夏でも涼しい。使いが都を発った頃、弓削は心を洗われるようなすがすがしさの中にいた。滝の後ろの山の上にポツカリと浮かんで動かない雲の白さが、青空に映えて美しい。緑の木々を背に、岩をも打ち砕かんばかりに流れ落ちる宮滝の水の冷たさ。だが、この水を以てしても、いったん火のついた恋心は簡単には消えそうにもない。

瀧の上の三船の山に居る雲の

常にあらむとわが思はなくに

(242)

この恋が成就できないなら死んでもいい。どうせ何時までも生きていられる命ではないのだから。お供の春日王が答える。

王は千歳に座さむ

白雲も三船の山に絶ゆる日あらめや

(243)

とんでもない。あの雲がいつもあの場所にかかって絶えることがないように皇子は何時までも栄えていらっしやるでしょう。

この歌がなぜかすぐに都に伝わって、瞬く間に評判になった。

「弓削皇子が吉野に籠って謀反を企てておられるらしい。」

『滝の上の』の歌は謀反の決意を歌ったものだということだ。

「春日王の歌は皇子を持ち上げて謀反を勧めているのだろう。」

弓削が何も知らずに山に籠っている間に、噂はどんどん尾ひれがついて一人歩きをして行く。

そうこうするうちに日向が夜陰に紛れて都大路で何者かに斬り殺された。

頬に傷のある黒い影が音もなく走り去るのを見かけた者がいるという。

血まみれになった日向の妻が息も絶え絶えになって、紀の宮殿に逃げ込んできたのはその明け方であった。後ろの首筋にかんざしが刺さっている。かんざしを見た紀の目が凍りついた。

「どうしてこれが。」

かんざしに見覚えがあった。桃の花をかたどったその黄金のかんざしは、紀が下絵を描いて山辺の婚礼の祝いに作らせたものだった。

山辺の母は紀の母の姉である。山辺が喜んでいつも髪に挿していたのを思い

出すと、紀は総身の毛が逆立つのを覚えた。これもまた、大津に殉じた山

辺の怨念のなせる業か。それとも、大津と山辺を殺した何者かが、紀の命ま

で狙っているのか。

(怖い。助けて。)

だが、紀を守ってくれるはずの夫は、見向きもしない。紀は一人絶望の淵に沈んでいく。

侍女がかんざしを抜こうとするのを紀が止めた。かんざしを抜けば血が噴き出してたちまち絶命してしまうだろう。日向の妻は紀の裾にすがり付いて震えている。何か言おうとするが、声にならない。

「何事です。話さねばわからぬではありませんか。」

口を開けた途端に、血を吐いた。妻は苦痛に顔を歪めながらも必死で声を振り絞る。

「・・・最初の・・・お文・・・に・・・せ・・・も・・・の・・・」

「偽物。それはどういうことです。」

紀の顔から血の気が引いた。女はすでにこと切れていた。

侍女たちに守られて自室に戻っても、紀の胸の高鳴りは一向におさまらない。弓削の最初の文。それは紀を想う弓削の心の内を切々と訴えていた。それなのにその後、宮中で会った時、弓削は紀のことなど気にもかけないといった様子だった。そのすました顔がおかしくて思わず笑ってしまった紀だった。その時初めて弓削は紀の存在に気づいたかのように、まじまじと紀の顔を見つめた。あの時から弓削は恋のとりこになってしまったのだ。全てはあの文から始まった。それなのに。あの文が偽物だとすると。

(毘だ。毘にかかってしまったのだ。)

弓削は毘にかかって后に恋をしてしまった。その上、今は謀反の疑いすら持たれている。それにしても、一体誰がこんな毘を仕掛けたのか。日向夫婦はその誰かを知っていたために殺されたのだ。紀に恋をさせて得をするのは誰か。紀妃か、石川妃か、いややはり三千代と宮子ではないか。唐ではかつて身分の低い照儀しょうぎから成り上った武后ぶこうが、后と妃を毘にかけて身分を取り上げ、手足を切り落として、豚のように肥溜こえだめに放り込んで殺したという。

紀は目に見えない黒い影に怯おびえた。

使いに促うながされて山を下りた弓削は、巷に広まる謀反の噂に激怒した。

「馬鹿なことを言うな。軍は兵政官が握いっているのだ。俺一人で謀反ができる訳がないではないか。」

腹が立った。いちいち釈明して歩くのもばかばかしい。釈明は春日に任せて弓削は宮に戻った。

弓削の無事な姿に、出迎えた氷高の目から涙が溢あふれた。噂を耳にして以来不安の余り、まんじりともしない日々を送ってきたのだった。弓削の腕の中で氷高の華奢な肩が細かく震えている。張り詰めていた糸が切れたように泣きじゃくる妻の姿に、初めて弓削は目が覚めた。

「すまなかつた。そなたが心を痛めていることにも気づかず、つまらぬ夢

を見た。だが、誓って、謀反など思いもよらぬことだ。」

氷高はまっすぐ夫の目を見た。氷高も二十歳になっていた。夫の目に嘘はない。初めて夫と心が通じた。喜びが不安をかき消すように満ち満ちてくる。

「私は信じます。誰が何と言っても私は信じます。」

弓削の手を握り返す氷高の手に力がこもる。

じっとしてはいられない。わずかな供を連れて外へ飛び出した。途端に目の前が暗くなった。ふらりとした。

「皇女様。」

「大丈夫です。」

侍女の差し出す手を振り切って走り出した。雲ひとつない空に真昼の太陽が容赦なく照り続けている。もう何日も雨が降っていない。風のない大倭の夏は息苦しいまでに乾き切っている。

駆けつけた先は阿閉の宮殿。阿閉も勿論弓削の噂は聞いている。真っ赤に泣きはらした娘の顔に胸が痛む。

「皇子様のご謀反など、根も葉もないことです。誰かの讒言です。」

汚れを知らずに真っ直ぐ育った娘である。その娘の眼を、母は信じた。

軽を呼んだ。来ない。何度も何度も催促されて、軽はようやく姿を見せた。

阿閉が尋ねる。

「弓削皇子の謀反の噂があるようですね。」

軽は二人の視線を避けるように答える。

「今、表で調べているところです。」

それから眼を上げると、珍しくきつぱりと言いつつ切った。

「内からの口出しはお慎み下さい。かばい立てなされば、姉上も同罪とせざるをえなくなります。」

無表情に全てを拒絶するかたくなさに、阿閉と氷高は驚いて眼を見合わせた。

氷高は薬師寺に籠っていた菟野にもすがった。

「謀反があったかどうかは調べればわかることです。でも、弓削がそなたをないがしろにして、後に恋をしたのは事実でしょう。」

菟野には孫の軽や氷高に対する弓削の無礼が許せない。いくら氷高に頼まれても、弓削を取り成す気にはなれない。

氷高はひたすら薬師如来に祈っている。娘の憔悴しきった姿に阿閉も手をこまねてはいられない。

（もう一度やってみよう。このまま黙って引っ込んでいては氷高が可哀想過ぎる。）

今度は自ら大宮へ出向いて軽を説得する。

「弓削皇子は謀反など起こす方ではありません。大津皇子の事件に関わった者が、今度も関わっているそうですね。大津皇子の不幸を繰り返してはなりません。あっ。」

自分で自分の言葉に驚いた。

（大津を殺した者と弓削を陥れようとしている者が同じだとしたら・・・まさか、あのお方が・・・。でも、どうして・・・。）

思わぬ疑念に取り付かれて、うろたえた。怪訝けげんな表情で見送る軽を残して大宮を出た。どこをどうやって帰ったのかも定かではない。

（あのお方のお考えなら弓削はもう助かるまい。）

水高が哀れでならない。軽もまた、草壁のように苦しむのであろうか。身を切られるような痛みを覚えた。

いつの間にか夜になっていた。ピクリとも動かない熱気が真綿のようにまつわりついて体を締め付ける。なぜか壬申の乱前夜の暑苦しかった近江宮の夜を思い出していた。

（私はいつも争いから逃げてきた。それで本当に良かったのか。自分一人なら良い。でも子供たちのために、このまま逃げ続けて良いのだろうか。大后様が戦ってこられたのも、ご自身のためではなく子や孫のためだったのだ。

それが母の性さがというものではないか。たとえそれが母の思い込みであったとしても、子のためには争わねばならぬ時もあるのではないか。）

戦い続ける菟野の姿が目の前に現われて、そびえるように阿閉の行く手を阻はむ。

（何時までも逃げてはられない。）

追い立てられるように立ち上がると、意を決して菟野の宮殿を訪ねた。

「弓削皇子をお助け下さいませ。」

日頃物静かな阿閉の必死の懇願を、菟野は興醒きよせいめた思いで見つめた。

「皇子は謀反など企んではおりませぬ。大津皇子の事件の時と同じ男が、陰で動いているのを見かけた者がおります。皇子を陥れようと企んでいる者がいるのです。皇子は無実です。これ以上血を流してはなりません。水高が可哀想です。すっかりやつれてしまいました。弓削に万一のことがあれば、軽もまた草壁様のように病気になるでしょう。もう、不幸な死はたくさんです。」阿閉の血走った眼から涙がほとぼしる。抑えてきた思いが堰を切ったように溢れ出す。遠回しではあるが、どう見ても菟野のやり方を批難していると思えない。これまで面と向かって菟野を批難する者はいなかった。いつの間にか菟野の額に微かな縦皺が浮かび上がっている。頬がピクピクと引きつる。重苦しい時が流れた。

やがて菟野が尋ねた。溢れる思いを押し殺すような低い声。

「私が大津を殺したと思っっているのですか。」

阿閉は虚を衝かれたように息を呑んだ。菟野は一言一言心の内を確かめるよ



うに言葉を紡ぐ。

「確かに私は大津がいなければ良いと思っていました。でもあの時は大王が亡くなられたばかりで、私にはまだ先のことを考えるゆとりはありませんでした。太政官から大津の謀反の報告を受けた時、内心喜んだのは事実です。そのことで責められるなら潔く謝りましょう。でもあの時点で大津を死なせては、大王の供養にはなりません。私としては大津が王位を諦めてくれさえすれば良かったのです。私は大津を許すように命じました。でも、遅かったのです。勿論、当時の全ての責任は私にあります。人が何と言おうと甘んじて受ける覚悟です。でも。」

菟野は、阿閉の目を見据えてきつぱりと断言した。

「弓削の件には一切関わっていません。」

阿閉はうろたえた。長年の菟野の苦しみを思うと、新たな涙がとめどなく流れる。

「申し訳ございません。お苦しい御心の内をもお察し申し上げず、今の今までお疑い申し上げておりました。何とぞお許し下さいませ。」

菟野の眼に微笑が浮かぶ。長い間、孤高の存在であった。言い訳などしたことはない。それでも理解者がいることは嬉しい。

「すでに、太政官には、死罪だけは避けるよう命じてあります。冤罪をも考慮して、心して調べるよう、改めて申し置きましょう。」

律令の制定によって、退位した大王の意思が、太政官では何らの効力も持たないことに、この二人はまだ気がついていない。

釈明を任せた春日が訪ねて来た時、弓削は余りのやつれように目を疑った。「申し訳ありません。どうしても信じていただけなのです。いえ、わかっているのにわからないふりをしているとしか思えないのです。私はもう疲れました。」

頬はこけ、すっかり老けてしまった春日は、生気を失った眼をしばたかせて悔し涙を流した。

春日が自殺したのはその夜のことである。弓削はもう逃れられないところまで追い詰められてしまったのを悟った。

（俺を謀反人に仕立て上げて大津兄上のように殺そうという訳か。はめられたな。女にうつつを抜かしている間にやられた。それにしても仕掛けたのは誰だ。あの女か。しかし、后になったのだ。これ以上俺を殺して何になる。最後に一度あの女に会って真実を問いただきたいものだ。だがそれも今となっては叶わない。）

無実を晴らそうにも相手がわからなければ動きようがない。

（死んで鬼となれば何もかもわかるのかもしれない。鬼となって俺を陥れようとしている奴を取り殺してやろうか。だが、俺が死んだら母上はどんなにかお嘆きだろう。悲しみの余り母上もまた亡くなられるかも知れない。氷高も泣くだろうな。）

残された日高の、涙に濡れた艶やかな髪、今にも崩おれそうなあえかな肩が泣き震える様を思うと、弓削は胸が張り裂けそうになる。

その頃、佐留は都中を走り回っていた。

「あの男を使っているのが誰かわかれば、皇子様の無実を晴らすこともできません。それまでお気を強くお持ち下さりませ。」

長や弓削の帳内も動員して頬に傷のある男を探し回った。吉備と長屋も八方手を尽くす。男を見かけた者は多いが、なぜか男の名も棲家も杏としてわからない。

その捜し求める男は北辰の星の男の館の一室に潜んでいた。

「伊太智ともあるう男が、とんだどじを踏んだな。しばらく外へ出るなよ。」

男の部屋を覗いた館の主は、その丸い顔にいつもの笑みを浮かべて小さな酒樽を差し出した。伊太智は黙って主の顔を睨みつける。主の笑顔を見るたびに、腹立たしい思いに駆られる己を抑えることができないのだ。

「相変わらず面白くない顔をしているな。まあ、それもよからう。腹が立つたらどんだん殺せ。だがこれだけは忘れるなよ。お前は俺の奴だ。俺の命令どおりにおればよいのだ。」

伊太智は歯噛みをして腕に爪を立てた。左の二の腕に押された焼印は、伊太智の心の奥底にまでもくつきりと焼き付けられている。

頬に傷のある男を求めて都中を駆けずり回っていた佐留の木靴が割れた。真つ二つに割れた木靴を手にして、佐留は言い知れぬ不安に襲われた。靴を懐に入れると裸足のまま弓削の宮へ駆けつけた。

佐留が血相を変えて跳びこんで来た時、弓削は既に自ら世を去った後だった。宮殿の前で茫然と立ち尽くす佐留の体から、張り詰めた力がすうっと抜けていく。その場にペタンと腰を落とすと涙が一筋流れた。涙が涙を誘うのか。佐留は一人大地を叩いて号泣した。悔しかった。己の腑甲斐なさを呪わずにはいられなかった。春日の死から一月が経っていた。

冷たくなった夫の亡骸に取りすがって泣き続ける娘の姿に、駆けつけた阿閉もまた己の無力を呪った。悔しかった。この時、初めて権力がほしいと思つた。ずっと閉じ込めてきた己の欲望の封印を開けた時、阿閉の胸は恐れに打ち震えるのだった。

弓削が死ぬと、一転して、謀反の証拠はなかったということと特に咎めもなく、葬儀は大王の例に準じて丁重に行われた。その墓は小さいながら、王宮の真南に当たる大王家の聖地に築かれた。さらに前年に定められた朝儀の

札に倣つて、壁には日像青龍朱雀、月像玄武白虎が描かれ、天井には天雲と星宿図が描かれた。

この時の葬儀に『人麻呂』は公の歌を詠んではない。既に官職は解かれていた。高市の挽歌を歌つて以来、菟野に召されることもなくなっていた。

公式の挽歌は歌仲間の置始おきはじめ東人が歌った。だが巷に流布したのは別の挽歌である。挽歌の主はわからない。恐らく弓削の幼い頃から親しく仕えてきたのであろう。むせび泣くような挽歌の主の悲しみが乗り移ってくるからであらうか、それとも弓削の最期を哀れむからであらうか、この挽歌は涙と共にたちまち都に広まった。

「佐留だろう、こんな歌を詠むのは、弓削も馬鹿なことをしたものだ。あんな女さつさと諦めていれば良かったものを。」

他人事のような素っ気ない舎人の言葉が結子の胸を刺す。

「皇子様のお兄上ではありませんか。なんて冷たいおっしゃりようです」と。

（長皇子様はどんなにかお嘆きであろうに。）

長の悲しみを思うと結子はいたたまれなくなる。世渡りのうまい舎人が憎い。こんな冷たい男、顔も見たくない。だがそれ以上にこの舎人から逃げ出せない自分が情けない。

弓削の後を追うように母の大江皇女が亡くなった。弓削の死が、大江から生きる力を奪つたのである。だが、若い氷高は何時までも泣いてばかりはられない。最後に心が通じた喜びが、弓削との思い出を暖かいものにしていく。泣いて泣いて涙が枯れると、弓削の死を振り返るゆとりも生まれた。

（皇子様は無実だ。）

では、弓削を陥れたのは誰か。軽の即位に反対しようとした弓削が死んで、喜ぶのは軽の一派である。あの時軽は事件に口出しするなと言った。

（では軽が仕掛けたのか。いや違う。軽が、后に恋するように仕向けるはずがない。）

ふと、ひらめいた。

（狙いは后と弓削の両方だったのではないか。）

二人に恋をさせて一緒に殺そうとした。男は引っかかったが、女は用心深い。そのうち男は不用意な歌を詠んだ。焦っていた仕掛け人は、とりあえず男に謀反の罪を着せて自殺に追い込んだのではないか。

（では、后を殺して得をするのは誰か。）

それは二人の妃と一人の夫人。三千代は軽を宮子の許もとへばかりやって、他の后妃には通わせないというではないか。全ては三千代の企みか。

（后が危ない。后を守らねば。）

矢も盾もたまず、氷高は阿閉の宮へ急いだ。